

ため第一版によつて附加へられた)。

本譯書の價值を更に増すものは、譯者が卷初に附せられた論文「ドロイゼンの歴史觀に就いて」であらう。こゝに於いてはドロイゼンの傳記と共に彼の思想的系譜が辿られ、彼の學問的所産の檢討と十九世紀ドイツ史學史に於ける彼の位置づけが果されてゐる。併し、譯者の關心は、主としてドイツ歴史學派に固有な歴史主義的歴史觀の克服と云ふ現代的課題の解決に向けられてゐる。「クローチエの、またトルルチの努力はこの課題の解決に對する寄與を直指してみた」(二六頁)。譯者が、本書の翻譯を企てられたのも、また「現代に於けるこの課題の解決に對する一つの材料」を提供されんとするものに他ならない。

尙、卷末には「譯者註」並びにドロイゼンの「著書及び參考文獻」が掲げられてゐる。共に吾々の便宜を考へられた譯者の親切として感謝すべきであらう。(翁版三三二頁。東京、刀江書院發行。定價壹圓七拾錢)。(中山)

○ 現 實 と 歴 史

一九三三年、米國史學會々議に於いて、同國の碩學 Charles A. Beard 教授は、「信念の一行爲としての歴史(敘述)」なる題目のもとに講演を試みた。(American Historical Review vol. 39 所載)その中で教授は、所謂歴史學の危機に就いて論究した後、歴史家の研究對象の選擇及其その配列とが、歴史家の生ける現實との聯關、即ち必然的にして、願望的な事物との聯關の

構造(Frame of reference)——教授によればそれは、democracy, Fascism, communism の三つに大別される——に強く制約せられること、又歴史家が一の敘述をなすことは、彼の信念に基いて行ふ一の行爲たることを強調してゐる。

教授のこの主張は現在に到るまで一貫し、益々強化せられてゐる。ヘヤード教授が前の講演を行つた翌一九三四年の同史學會議の席上で、Theodore Clark Smith 氏が、(恐らくヘヤード教授等の主張を前提としてであらう)米國に於ける歴史家をば大別して、「一を純粹に「客觀的眞理」の追求のみに努力する人々、今や消滅せんとしあるこの noble dream を抱ける人々、と、他を、この夢と理想とを脅かしつゝある、黨派的な doctrinaire な人々、特に歴史の經濟的説明に據る人々、又今日の生活の混亂に何等かの光明を與へんと意識的に試みる人々との二つとし、その間に架橋することの出來ぬ深溝が存することを主張した。(Am. His. Rev. vol. 40 所載)

このスミス氏の論說に對して、ヘヤード教授は、That Noble Dream なる一の駁論を發表し、(Am. His. Rev. vol. 42)そこに於いても、スミス氏が強調する如き、「ランケ流の「客觀的眞理」乃至は所謂「歴史主義」(Historicism)の立場の支持し難き」とを情密なる分析によつて指摘し、多様な現實と密接に結びつくことによつて、反つて「歴史的眞實」に接近しうることを力説してゐる。

ヘヤード教授のこの貫徹せる主張は、Alfred Vagts 氏と共に

に現代歴史敘述思潮に就いて、最近發表せられた一論文 (Am. His. Rev. vol. 42, No. 3, April, 1937) の中に更に明確に提示せられてゐる。

× × ×

最近の世界の情勢は、人事現象を研究対象とする人々をして事物の趨勢や自己の仕事の將來に關して無關心のまゝに放任せしめない。西洋文明を動搖せしめつゝある政治・經濟の危機に對し、歴史の諸相を研究対象とする人々が象牙の塔に籠り、眼前に展開する現在に全然無關心で、而も過去に就いての眞實を知りうる望をもつことは可能であるだらうか。頑丈な壁を通して現實社會の叫喚は歴史家の書齋に入りこんで來ないのだらうか。何故、人類の成果に何等の光明をも投げ與へない様な問題を研究するのかと若き人々は反問しないだらうか。

ベアード教授は斯く歴史家が現實社會に無關心たり得ざることを強調し、更に進んで積極的に、現實としての歴史解釋に上述の三つの政治的態度を必要とすることすら述べてゐる。

他方に於いて、從來の「歴史思想」自體の發展による内的矛盾が暴露され、「歴史主義」に對する反省によつて、今や新らしき歴史概念の出現を教授はクロイチエを引用して主張する。大戰後の獨逸、歴史主義の發祥地である獨逸に於いて、特にこの問題に關する論議が最も活潑に行はれ、「現實としての歴史」と「歴史敘述」とが精密に檢討された。然るに「歴史哲學をもたぬ米國の歴史家達は、それを欲しない所か、それに不信任を示す。

彼等はそれを問題にしてゐる人々を、あたかも、侵入者か神秘家かの如くみなし、「又事實を曲解し」體系の名のもとに大なる混亂を惹起する者と考へてゐる。だが、米國の思想傳波の遲進性によつて、一九一二年にクロイチエを僞ました問題が、一九五〇年頃に米國で論ぜられることであらうと教授は皮肉つてゐる。

恐らく、米國の歴史家達にその特殊性を明瞭に示さんとする爲であらう、教授は次にマイネッケの最近の著作「歴史主義の成立」を可成り詳細に紹介してゐる。(マイネッケのこの書に就いては本誌前號に紹介せられてゐる。)

斯くて、教授は新らしき歴史敘述は從來の如き、物理學乃至生物學とのアナロジーより完全に脱却し、自己の主題にふさはしき用語を持たねばならぬことを、即ち新らしき歴史敘述は「現實としての歴史 (history as actuality)」に、歴史家自體の主觀的或は心理的本性に歸すべきであると主張する。こゝに於いて、個々の歴史家の現實との關聯の仕方 (scheme of reference) が重要な意味を持つ問題になる。しかしこの結果から陥り易き歴史の相對論・懷疑論は、「關聯の構造の性質と數とが可成り限定せられてゐる故に救はれる。だがこの關聯の仕方自體が永久に價値あるものでない限り、再び相對主義に逆轉する様にみえるが、しかし、それは混沌に墮するのではなく、反つて歴史の絶對的眞理といふが如き幻覺より解放される。而もかゝる態度をとることは、決して歴史研究の科學的精密さを否定するもので

はない。かくすることによつて、批判的歴史主義方法を含みつつ、而もその限界を益々強く意識して、眞に廣き深き現實としての歴史が可能になり、従つて又夫々の國の政策 (public policy) に役立つ、又そのことが歴史家としての責任を果すことに他ならないのではないだらうかと教授は結んでゐる。

X X X

歴史學に於ける所謂「現在」の重視、現在の立場が、直ちに教授の力説する如く、現實社會の動向に結びつくべきものであるか否かの問題は別としても、確かに、歴史家が自己の現實に無關心な態度をとることは、教授と共に、排斥しなければならぬ。社會の一員としての歴史家は、その歴史敘述こそ自己の信念の表示としての一行爲であるべきことは云ふ迄もなく、又實にそのことに歴史家としての責任が存する。多くの歴史家が動もすれば絶對的客觀的な眞理といふ幻想を追求しがちであり、又従つて精密にみゆる物理學的、生物學的方法によつてのみ歴史事實の認識に向ひがちなる時、このベアード教授の言は確かに聞くべきであらう。

然し、教授のこの主張よりして直ちに歴史家が政治家たることを容認するが如き誤解は嚴重に警戒せられぬばならない。假りに教授の云ふ如き三つの對社會的な政治的態度が存し、その何れを我々が擇ぶにしろ、そのことは、歴史家に政治家たることを要求するものではない。歴史は政治の下僕ではない。歴史家はあくまで自己の限界を守るべきである。

自己の信念の表現としての歴史敘述は、従つて事實を強ひて曲解することを意味しない。事實こそ、既に古くビエール・ペールが考へた如く、歴史家のアルファでありオメガである。單なる史料の蒐集、批判、編輯に終るのではなく、強き自己の信念を自覺して、あくまで科學的に事實を追求することこそ、歴史主義や歴史に關する抽象的概念論争や乃至は非科學的、神祕的な歴史敘述を克服して、歴史家としての眞に自己の責任を果すことではないだらうか。(前川)